

「異文化」とされる側の記憶と表象 在日朝鮮人と博物館運動

Memories of those Classified as 'Other Culture' and its Representation:
Zainichi Koreans (Zainichi chosonjin) and Museum Movement

君塚仁彦

KIMIZUKA Yoshihiko

- ①「異文化」としての在日朝鮮人と本稿の課題
- ②在日朝鮮人展示に関する国内の諸動向
- ③在日朝鮮人による記憶の継承と表象
- ④むすびにかえて

【論文要旨】

日本国内で「異文化」とされる存在。そこには、在日外国人の歴史、そして生活・文化がある。その多くは、日本の近代化への歴史的過程における海外移民や植民地政策の延長線上にあるが、在日外国人のなかで、在日中国人である華僑とともに最も古い歴史を持つのが在日朝鮮人である。本稿では、在日朝鮮人の労働そして生活の記憶をとどめようとする、設立母体の異なる二つの博物館、丹波マンガ記念館（京都市）と在日韓人歴史資料館（東京都）の二館を取り上げ、在日朝鮮人の記憶をどのように記録し、いかに展示表象しているのか、その内容と意義を、在日朝鮮人による博物館運動に焦点をあてながら明らかにした。この2つの博物館展示が物語っているのは、日本人・日本社会にとって在日朝鮮人、あるいは在日朝鮮人社会が「隠された存在」であり続けているということである。日本社会で多文化共生を実質化していくためには、本稿で取り上げたような博物館は必要不可欠である。在日朝鮮人の記憶の継承と課題は、日本における固有の歴史的課題であり、今後は、行政立の施設もこれを分担すべきであろう。地域史概念の中に、より積極的に在日朝鮮人の生活史、彼ら、彼女らが果たしてきた歴史的かつ社会的役割について組み入れる必要があり、史実の掘り起こしや継承という点も含めて、公立博物館の展示にも反映させなければならない。博物館の歴史展示が、彼ら、彼女らを一方的に「異文化」として位置づけ、囲い込むのではなく、差別・抑圧の歴史を認識し、それを乗り越えていくためにも、産業・文化などで果たしてきた役割をより積極的に明らかにし、関連資料の収集・保存・公開を図っていくことが重要である。在日朝鮮人は文化的側面だけで記憶され、表象されることも多いが、差別や抑圧、人権問題を踏まえた展示や継承する植民地主義的な状況を伝えていくことも大切である。二つの博物館の展示表象は、そのことの大切さを端的に物語っている。

①……………「異文化」としての在日朝鮮人と本稿の課題

日本国内で「異文化」とされる存在。そこには、在日外国人の歴史、そして生活・文化がある。全人口のわずか1.5パーセントという数ではある。しかし、在日外国人の存在は現在に至るまで日本社会に大きな影響を与え続けている。そしてその存在の多くは、日本の近代化への歴史的過程における海外移民や植民地政策の延長線上にあると考えてよいであろう。

とくに在日外国人のなかで、在日中国人である華僑とともに最も古い歴史を持つのが在日朝鮮人である。⁽¹⁾ 諸説はあるものの、朝鮮人が日本に居住するようになっておよそ100年が経過したと見てよい。改めて確認しておきたいと思うが、在日朝鮮人とは、日本による朝鮮の植民地支配により、結果として日本の領域内に取り残され、生きることになった朝鮮人を指す。言い換えれば、1945年8月15日の日本敗戦により朝鮮が日本領土から切り離された時期以降、日本に在住せざるをえなかった朝鮮人とその子孫たちのことをいう。その移動は基本的に自由意志でないものであり、旧植民地宗主国である日本に在住していることを考えても、日本による朝鮮植民地支配の歴史的被害者としての側面を持つことは論を待たない。そして現在も、残念ながら、彼ら、彼女たちに対する偏見や差別意識は拭い去られてはいないのが実情である。⁽²⁾

最初に在日朝鮮人の人口推移について簡単に見ておきたい。1910年の「韓国併合」以前、日本に来る朝鮮人は、留学生や土木工事・炭鉱労働に従事する季節労働者などがわずかに見られただけであり、「併合」時点では約2000人という数であった。しかしその後、植民地支配の進展の中で強行された土地調査事業、産米増産計画などにより、土地を収奪され、生産・生活基盤を奪われた多くの農民たちが移住労働者として日本へ渡ってきた。とくに第一次世界大戦を契機に1910年代後半からその数は急増し始め、1917年には約1万4000人、1924年には12万人近くに増え、日中戦争開始時の1936年には69万人を突破している。

そして、1939年秋には朝鮮人に対する戦時労働動員が開始され、日本「内地」の在日朝鮮人の人口は、1940年に約110万人、1944年には190万人を超える数となった。戦時労働動員では労働力として日本国内・南樺太・南洋諸島に強制連行された人びとも数多く、そのうちほぼ半数は炭鉱に、残りは鉱山、ダム・鉄道を含む土木建築現場、工場、港湾荷役、農場などへと送り込まれていた。1945年の日本敗戦時には、約200万人を数える朝鮮人が「内地」で生活を送っていた。⁽³⁾

このように在日朝鮮人は、その全てが強制連行されてきたわけではない。しかし、戦時労働動員とともに、植民地支配の進展が朝鮮人農民の生活基盤を破壊し、将来的な生活設計を失わせたこと、そして生活の貧困を深刻化させ、再生産させていったこと、それらが在日朝鮮人を生み出した歴史的背景であることを、現在の日本社会は改めて確認し、認識する必要があると思われる。歴史学研究者である朴慶植は、^{パクキョンシク}「日本帝国主義の朝鮮支配のために故郷を追われたか、あるいは、太平洋戦争のために強制的に連行されたものおよびその子孫である」と在日朝鮮人を定義している。⁽⁴⁾

在日朝鮮人は、「内地」の労働現場や生活地域で差別的な待遇を受けることが多く、常に失業や労務災害、そして劣悪な栄養・衛生状態を原因とする病気の危険にも曝されていた。そのような状態の中で、在日朝鮮人は独自の努力を積み重ね、互助組織などを立ち上げて、労働現場に近い場所

や河川敷・埋立地・低湿地など、生活環境が悪い場所などに集住地域を形成した。大阪市の「猪飼野」(現・大阪市生野区桃谷・中川地域)や神戸市の長田区、川崎市、東京都新宿区大久保などは、代表的な在日朝鮮人の集住地域であり、そこには朝鮮人向けの飲食店や商工サービスなどが展開した。

1945年の日本敗戦後、解放された多くの朝鮮人は帰国する。しかし持ち帰り財産の制限や祖国の政治的不安定、故郷における生活基盤の喪失などの理由によって、約70万人の朝鮮人が日本にとどまる道を選ばざるをえなかった。しかしながら、解放後の在日朝鮮人の生活は平坦ではなかった。軍需産業の停止や海外からの日本人の引き揚げなどにより彼ら、彼女たちの多くが職を失い、帰国事業、生活環境、労働環境、民族教育、文化活動、などの場面でさまざまな苦難に直面した。在日朝鮮人三世・四世の時代になりつつある現在でも、国籍条項などによる差別的処遇に象徴されるように、政治的・社会的に言わば「二級市民」としての位置しか与えられていないという状況に置かれ続けている。

このような歴史的経過を持つが故に、日本の侵略戦争や植民地支配と密接な関連がある在日朝鮮人の歴史は、日本国内で「負の記憶」として認識され、特殊化されることが多かった。日本国内の歴史系博物館では、一部の例外を除き、「負の記憶」を積極的に記録・展示する傾向にはなく、学校教育における社会科・歴史教育の場でも、学ぶ機会が十分に確保されているとは言いがたい状況にある。したがって、多くの日本人、そしてまた韓国人の多くも在日朝鮮人の歴史や社会的状況などについて十分な知識を持ちえていない、一部には深刻な誤解さえ生じているというのが現状であろう。そのような日本の状況に対し、これまで在日朝鮮人の側が優れた文学作品や映画などを通して、自らの置かれ続けてきた社会的状況や歴史について主張し、情報発信してきた経緯があり、またそれを理解する一部の日本人がそのことを支えてきたという側面があるものの、博物館の世界では積極的な取り組みがほとんどなされてはこなかったのが実情である。

しかし、日本には数は少ないとは言え、歴史の襲いに落ち込み、地方史や地域史の中で忘却されようとする「負の記憶」を掘り起こし、継承する試みを行おうとしている博物館がいくつか存在する。忘却に対して記憶の闘いを試み、告発だけを目的とするのではなく、資料や証言、そして画像や映像を並べ、あるいは労働や生活の場を残し、展示空間化することによってその記憶を表象し、歴史を継承しようとする博物館が存在する。

本稿では、その中から在日朝鮮人の労働そして生活の記憶、差別・抑圧の記憶をとどめようとする、設立母体の異なる二つの博物館、丹波マンガン記念館(京都市右京区)と在日韓人歴史資料館(東京都港区)の二館を取り上げることとしたい。在日朝鮮人の記憶を、いかなる意図の下に博物館がどのように記録し、表象しているのか。本稿では、主に在日朝鮮人による博物館運動に焦点をあてながら、その内容と意味、そして意義を明らかにすることを主要な課題としたい。

そして、本稿において、なぜ「記憶」なのかという点についても若干触れておきたい。「記憶」という問題設定をする場合、そこで行なわれる作業がどのような知的関係性を構築し、何に関与するのかということが問われなければならないと思われる。周知の通り、歴史学においては文書記録などの記録資料(アーカイブ)に残るものだけが歴史とされる傾向が強かった。そのため、当然ながら、そこから落とされてきたものも無数に存在する。アーカイブとして残されているものだけが

歴史になりうるのではなく、そこから消去されているものも含め、発言あるいは証言などの形にし
か残されていないものも歴史として取り上げていく姿勢。オーラルヒストリーのように聞き手とし
ての研究者とネイティブ・インフォーマントという関係性に収斂させず、同時に、それを「聞き取
り資料」としてのみ捉えるのではなく、「語りだされた」言葉を積極的に歴史学の資料として認識
する姿勢。「記憶」を考える場合、そこには、抑圧された者に潜在する、公に記録されてはいない、
見えなくなってしまう過去の体験、その存在を示唆する可能性がある。抑圧されたものの過
去を通して、現在に介入していくための手段として、本稿では「記憶」という問題設定を積極的な
ものとして捉えていきたいと考える。

②……………在日朝鮮人展示に関する国内の諸動向

先にも述べたように、日本国内の博物館で在日朝鮮人の歴史や社会的状況を展示表象する館はき
わめて少ない。特に公立の歴史系博物館では、この問題を正面から取り上げる館はほとんどない
と言ってよい。⁽⁵⁾それは既に指摘したように、在日朝鮮人の歴史が、日本社会の中で「負の歴史」とし
て認識されていることと無縁ではない。それでも、第3セクター方式で運営されている館を含む公
立博物館では、大阪人権博物館（リパティおおさか）、東京都江戸東京博物館がそれぞれコーナー
展示を行っており、国立では、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、国立ハンセン病資料館
などが在日朝鮮人を展示対象として取り扱っている。数少ない事例ではあるが、国公立博物館のこ
れらの動向には、その内容や方向性を含めてより注目すべきものがあると思われる。

大阪人権博物館では、常設展示の「在日コリアン」展示コーナーで、「植民地支配と差別の撤廃」
と「指紋押捺拒否」を展示対象として取り上げている。⁽⁶⁾東京都江戸東京博物館や国立歴史民俗博物
館では、関東大震災時における朝鮮人虐殺を絵画資料により部分的に展示している。

国立民族学博物館では、常設の映像展示コーナーや特別展で在日朝鮮人を対象として取り上げて
おり、とくに、2004年に開催された『多みんぞくニホン－在日外国人のくらし－』展では、在日
朝鮮人の歴史を学術的に押さえた上で、彼ら、彼女たちをめぐる社会的状況や今後の方向性を「多
文化共生」の視点で考えようとする、資料や証言を媒介にした意欲的な展示が見られた。⁽⁷⁾

2007年、旧高松宮記念ハンセン病資料館を全面リニューアルしオープンした国立ハンセン病資
料館（東京都東村山市・国立療養所多磨全生園内）では、常設展示室の証言映像や文書資料・写真
資料で、在日朝鮮人ハンセン病回復者の歴史や生活について伝えている。この博物館は、ハンセン
病回復者による権利回復運動の成果としての側面も持つが、証言映像では、これまでハンセン病史
研究の中でも積極的に語られることのなかった在日朝鮮人の姿、そして彼ら、彼女たちが受けてき
た労苦、差別が浮き彫りにされており、ハンセン病による差別や民族差別・女性差別など、二重三
重の差別・抑圧に苦悩し、それでも生きることの価値を見失わなかった回復者の姿が証言を通して
表象されている。

ここでは一例のみを紹介する。同館の常設展示室「不治から可知へ－化学療法のはじまりと新し
い療養生活」の展示コーナーに「誇り」と題されたケース展示がある。ケース内には、「全盲連書
面会議・事務局報綴 多磨盲人会」（1957年）と「八病同盟の機関誌」（1963年）の二点の資料が

展示されている。前者は資料原本が、後者は資料原本そのものではなく、見開きページ部分のコピーが用いられており、内容を読んでもらうことを意図した展示であることが理解される。このケース展示には「誇り」と題された、次のような展示解説が付されているが、その一節に次のような表現がある。

在日韓国・朝鮮人の入所者も（盲人の入所者同様に－引用者注）、1959（昭和34）年、全国組織「在日朝鮮・韓国人ハンセン氏病患者同盟」（ハ氏病同盟）を結成し、外国籍を理由とした格差是正などのほか、民族意識を保持する拠点となった。

また、「ハ病同盟の機関誌」の展示キャプションには、「同じ入所者であるにもかかわらず、国籍を理由に生活費に大きな差がつけられる理不尽さを改めるべく訴えた」との説明がなされている。この問題は、1959年に国民年金法が在日朝鮮人を支給対象から除外する形で制定されたことに端を発している。国籍による年金差別問題は、日本人入所者同等の権利を要求して闘った在日朝鮮人入所者共有の「苦渋の記憶」になっており、いくつかの入所者自治会史などにも、ごくわずかではあるが記録されている。

年金差別問題は、1971年度から「自用費」方式での「解決」が図られ経済的な格差は解消されるが、日本人入所者との質的な対応の違いは残されたままであった。国立ハンセン病資料館が、通史はもとより、ハンセン病史研究からも欠落しかかっているこの問題を展示し、また映像や実物資料で在日朝鮮人入所者の生活や記憶を伝えていくことの意義は、これまでの経緯を考えると決して小さくないと思われる⁽⁸⁾。

公立や国立ではない民間の博物館では、本稿で取り上げる丹波マンガン記念館（京都市右京区）や2005年に開館した在日韓人歴史資料館のほか、2001年に東京都新宿区大久保に開館した高麗博物館がある。丹波マンガン記念館と高麗博物館はNPO法人が、在日韓人歴史資料館は在日大韓民国国民団（通称「民団」）が設立運営の主体となっている。

高麗博物館は、10年余りに及んだ在日朝鮮人と日本人が共同で立ち上げた博物館運動が基盤となって設立された博物館である。古代から現代に至るまでの日本と朝鮮との交流史を展示の機軸に据えつつも、近代における植民地支配の問題も含めた在日朝鮮人の生活史を多面的に表象しようとしている。雑居ビル内にある小さな博物館であるが、設立経過や目的を含めて、重要な視点・内容を提示し続ける博物館であると言えよう。

同じく民間団体であるVAWW-NET ジャパンは、2005年、アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」を東京都新宿区に開館し、「慰安婦」問題を中心に、旧日本軍による性暴力を受けた在日朝鮮人被害者の展示を行っている。

このように、日本国内ではわずかな事例ではあるが、在日朝鮮人を展示対象とする動きが見られる。いずれも1990年代から、それ以降の動きであるが、それらは歴史認識や記憶をめぐる論争の影響なども受けつつ展開した。同時にこれらの動きは、在日朝鮮人社会の側面から見れば、一世の数が減少し、その記憶の記録化や継承が現実的かつ切実な課題になってきたことを意味しよう。

とくに、世代交代が進む中で、在日朝鮮人一世の記憶を語る生活道具や生産用具、写真などは次々

とその姿を消している。実物展示が活動の中心となる博物館としては、致命的とも言うる状況になりつつある。一世の祖父・祖母が亡くなって遺品を整理・処分した話や、さまざまな事情で移動をする人も多く、引越しを繰り返すたびに必要のない古物を処分してしまったという話は関係者からもよく聞く話である。

繰り返しになるが、在日朝鮮人の記憶や歴史について、ほとんどの公立博物館は、これを取り上げることをしない。取り上げないということが、一体、何を意味するのか。植民地期には「大日本帝国臣民」とされ、日本敗戦後もサンフランシスコ講和条約締結時までは「日本国民」であり、その後、一転して「在日外国人」とされた在日朝鮮人。都民であり、府民であり、県民であり、市民であり、町民であり、村民である外国籍を持つ地域住民として生活している彼ら、彼女らを、公立博物館は、そのスコープから落としてきたし、落としている。郷土史・地域史や自治体史、さらにはハンセン病回復者の自治会史からもその姿や歴史を十分に見ることはできない。

植民地の被支配者側の記憶が、支配者側の社会で十分に継承されえないという事実。「抹消されかねない状況」にあるという事実。しかし、その事を認識する人は多くない。なぜならそれは、大多数の日本人にとって、今現在を生き抜く上で「自分には直接関係のないこと」だからだと思われる。多数派にとっての「負の歴史」を、「知ろうとしない」「知らない」「忘れてしまう」「無かったことにする」といったことが、いかに当事者に対して「苦痛」を与えることであり、「暴力」となりうるのか。日本国内のわずかな事例をたよりに、そのことに思いを馳せてみる必要があるのではないかと思われる。歴史を取り上げる博物館には、そのことを手助けしていく役割があるのではないか。

③……………在日朝鮮人による記憶の継承と表象

(1) 丹波マンガングン記念館

先にも述べたように、日本国内には、戦争・植民地記憶と在日朝鮮人の問題に正面から取り組む博物館がいくつかある。その一つが、朝鮮人マンガングン鉱山労働者の記憶継承を目的として1989年に設立された丹波マンガングン記念館（京都市右京区京北下中町）である⁽⁹⁾。

この博物館は、一人の在日朝鮮人二世の元マンガングン労働者・李貞鎬^{イジョンホ}氏が、私財を投げ打って設立したフィールドミュージアムである。強制連行も含めた戦前・戦後のマンガングン労働に従事した⁽⁹⁾在日朝鮮人の歴史を、労働史・産業史・生活史という側面から輻輳的に取り上げた日本で唯一の博物館であるといえよう。

李貞鎬氏は、館長に就任してわずか6年後の1995年、マンガングン労働者の多くが罹患し苦しめぬいた病「じん肺」によって帰らぬ人となってしまった。幼い時に父を失い、母親が帰国した後にマンガングンを採掘していた伯父に引き取られ、丹波地方のマンガングン鉱を転々とし、40年間ほどの鉱夫生活を送った人物である。しかし個人立の博物館にはよく見られるように、同館の運営状態は厳しく、2001年、行政からの支援が全くない同館の経営は危機に瀕し、閉鎖も考えられる状態に陥った。李館長一家がこれまでつぎ込んだ資金は7000万円を越えたとも言われる。同年12月、「丹波マンガングン記念館支援記念集会」が開かれ、「丹波マンガングン記念館を支える会」を中心に支援運動の

輪が広がった。現在では同館を NPO 法人が運営しているが、財政状況にはかなり厳しいものと聞くと聞く。

丹波マンガン記念館は、一般向けの博物館ガイドブックや、観光ガイドにはほとんど載ることがない。しかしこの博物館は、今では黒豆の産地としてその名が広く知られている丹波地方に、かつて良質なマンガンを産出する鉱山が集中していた事実、そしてそこで生きてきた労働者の記憶を、保存された旧マンガン鉱山（新大谷鉱山）の坑道や多数の鉱山道具、そして綿密な調査を経て収集された労働者たちの証言記録などを通して、物静かなトーンで伝えてくれる。

しかしこの博物館では、マンガン鉱山の歴史を、単に丹波地域史の一環として「記念」するための展示は行っていない。展示を通して浮き彫りにされるのは、日本社会によって、その記憶を抹消されかねない朝鮮人マンガン鉱労働者の記憶、被差別部落マンガン鉱労働者の記憶、強制連行され、重労働に耐え、難病である「じん肺」に苦しむ労働者の記憶、日本の「正史」から除外され、時間の流れに埋もれ、多くの人々から忘れられ、社会から抹殺されかねない状況にあるその記憶なのである。

マンガンは、乾電池の原料としてよく知られている。また、陶磁器や瓦の釉薬、ビンの色づけなどにも使われる。しかし工業的には、合金として鉄鋼の補強にマンガンを用いることが一般的で、戦争に使う大砲や戦車などの兵器生産には必要不可欠な鉱物であった。そのためマンガンは、近代日本の植民地支配・侵略戦争に必要な軍需物資として位置づけられ、日本がアジア・太平洋戦争に突入する 1930 年代にはマンガン採掘が盛んに行われるようになった。丹波のマンガンは良質なものが多く、品質のよいものはドイツにも輸出され、U ボートの電池原料としても使用されたという。

戦時中、石炭やマンガンをはじめ軍需物資として重要な鉱物の採掘は人海戦術で行われていたが、戦争の激化とともに多くの成人男性が兵士として動員された。そしてそのことで生じた極度の労働力不足を補うため動員されたのが、「募集」や強制連行で日本に来た膨大な数の朝鮮人や中国人であった。同館によれば、丹波地方約 300 のマンガン鉱山には、およそ 3000 人以上の朝鮮人が採掘や運搬などの苛酷な重労働に従事していたとされる。採掘では機械を使わないため、ハンマーを振り上げて手作業でマンガンを掘り出し、数十キロから数百キロにもなるマンガン鉱石を木製の手押しトロッコで外に運び出し、近くの集積地まで人力で運搬した。

そしてマンガン鉱労働者のほとんどが、マンガンの母岩であるチャートを発破したときに出る粉塵を吸い込むことによって発症する「じん肺」に冒された。「じん肺」とは、長期間にわたって吸い込んだ鉱石や金属などの粉塵が肺に沈着し、肺の組織を線維化させ、進行すると呼吸不全などを引き起こす不治の難病である。「じん肺」に冒され、現在もなお、在日朝鮮人をはじめとする多くの元マンガン鉱労働者が苦しんでいる。しかし、その事実を多くの日本人は知らない。朝鮮人が働いたマンガン鉱山の記憶は、日本社会の中から時と共にどんどん失われ、途切れかかっていた。

李貞鎬氏が博物館設立に立ち上がらざるをえなかったのは、そのことが大きな理由である。マンガン鉱閉山後、彼は、マンガン鉱山の歴史を公に継承していくために、京北町役場（当時）に向いて博物館を設立すべきであるとの申し出を行なった。しかし、町当局からこの提案は冷淡に拒絶された。しかし彼は、朝鮮人マンガン鉱労働者の記憶を、公的な情報として位置づけることの必

要性を強く感じていた。公的な歴史に登録する十分な存在価値があると考えた。その根底には、日本国内にある鉱山博物館の展示が、「この側面を無視している」ということに対する批判があった。その批判意識が、彼の言葉によく表れている。

日本でいつまでも局外者としての人生を送る立場を選んだ人たちは基本的人権をうばわれるばかりでなく、日本人ならばだれしも最も大切に思うこと—社会への貢献を評価し、数々の思い出を集め継承していく場所—さえもつことをゆるされないのであるということを、人生を通じて学んできた。…(中略)…朝鮮人も日本人と同じように彼らの祖先が生活したところでかけることができるはずだ。そして、先人たちがどんな状態におかれていたかを学ぶだろう。…(中略)…もし今われわれが死んでしまうと私たちの歴史は消えてしまう。だれかがこの歴史を語りつがねばならない。⁽¹⁰⁾

丹波マンガ鉱山労働者の記憶—それは公としてはできれば残したくない、公によって継承を拒否された記憶なのである。「町のイメージが暗くなる」という当時の町長の歴史認識とその後の行動は、日本の植民地主義がもたらした「負の記憶」「加害の歴史」を、公が静かに削ぎ取る行為に他ならない。そのことに直面したとき、李貞鎬氏の心には、記憶の「抹殺」に抵抗し、鉱山労働者の記憶を継承する博物館を設立するという信念が芽生えた。「ワシは、将来歴史資料館を建てたい。むかしの鉱夫たちの資料を集めて、その生活をパノラマにしたい。ワシも、ここで鉱山やっていたという塚(墓)を建てたい」という彼の言葉には、その心情がよく表れている。⁽¹¹⁾

李貞鎬氏が自ら企画し、「マンガ鉱山史を記録する会」が製作した『生きた、闘った、そして倒れた—李貞鎬の生涯』というビデオがある。その中で彼は、記念館建設への意欲と目的について「採鉱場と選鉱場と、いろいろそういうものを学校として成り立つか成り立たないかしらんけど、いっぺんそれをやってみようと思うとるんです」と語っている。

日本社会の中で忘却されようとしている朝鮮人マンガ鉱山労働者の歴史を語り継ぐための「学校」として、記念館を記憶継承と歴史教育の場として構想していたことを伺わせる。

「マンガ鉱山資料庫」と名づけられた常設展示室には、マンガという鉱物の特質や丹波地方

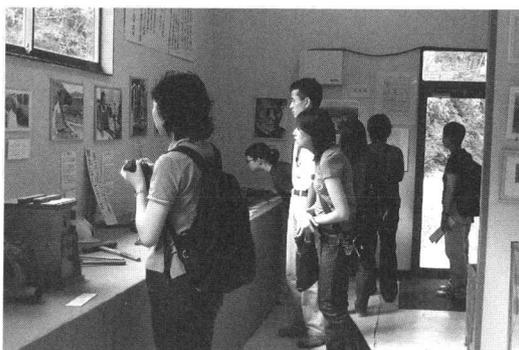


写真1 「マンガ鉱山資料庫」展示室における常設展示(筆者撮影)



写真2 見学用坑道「川端大切坑」(筆者撮影)

のマンガン鉱山の分布図、実際にマンガン採掘に使用された道具類、記念館を取り上げた新聞記事などの文献資料類が多数展示されている(写真1)。最新式の展示機材などは一切ない。資料が淡々と並べられているだけである。しかし、道具類の前には、マンガン鉱山での自らの労働について証言する在日朝鮮人一世の証言と写真がパネル展示されている。それはまさに、日本の「正史」には登録されないマンガン鉱山労働者の歴史そのものであり、李氏が、自らの体調を崩しながらもマンガン鉱山に生きた在日朝鮮人一世の歴史を丹念に掘り起こしてきた調査研究の成果に他ならない。証言とともに見学を進めると、道具類の展示に一層の迫力が増す。

そして1950年に開坑され、現在見学用坑道として改修され、保存・公開されているのが、旧・新大谷鉱山の川端大切坑である(写真2)。約300メートルにわたる坑道展示では、過酷なマンガン鉱山の労働現場が再現されており、その具体的な状況が見学を通して追体験できるようになっている。鉱山が全廃されている現在では、マンガン鉱山労働史の実物展示として、きわめて貴重な現地保存資料となっている。

忘却の危機にある朝鮮人マンガン鉱山労働者の記憶を掘り起こし、展示し、語り継ぐ。ビデオには、酸素吸入器を前にユーモアを交えながら情熱的に話しかける学習会での李貞鎬氏の姿がある。「じん肺」で呼吸が苦しくなり、坂を自力で登ることができず、現館長であるご子息の李龍植氏におぶさりながら聞き取り調査に精力的に歩く彼の姿がある。マンガン鉱山の跡地を探索し、飯場として使われていた建物を訪ね歩く彼の姿がある。その姿は、丹波のマンガン鉱山で最後まで働きぬいた彼の、自分たちの記憶、被害の記憶を抹殺されるという「暴力」に対する抵抗の表現に他ならない。見学用として保存・公開されている川端大切坑と内部の展示は、まさに土地に刻み込まれた在日朝鮮人マンガン鉱山労働者の記憶に他ならないのである。

(2) 在日韓人歴史資料館

本稿で取り上げるもう一つの博物館は、2005年11月、丹波マンガン記念館とは異なる設立経過をたどり開館した在日韓人歴史資料館である(写真3)。前述したように、この博物館は在日大韓国民団(通称「民団」)が運営主体となっており、小規模館とはいえ、事実上、韓国政府の支援も得て設立された。この博物館が開館した年は、1905年11月に第二次韓日協約(乙巳条約)が制定されてから100年目にあたる。同年12月には韓国統監府が設置、初代統監に伊藤博文が任命され、日本の朝鮮植民地支配が事実上開始される年である。

同館の開館記念に発行された展示解説書『100年のあかし』の冒頭には、資料館の目的として「在日が日本へ渡航した事情、当時の生活実態、権益擁護運動、民族教育、文化・芸術活動などの各種資料を収集・整理し、それらを展示・公開することを通じて、在日の歴史を後世に伝えていくこと」と書かれている。さらには「在日を総体的に網羅し、個人の信条や所属団体、あるいは国籍



写真3 在日韓人歴史資料館
エントランス(筆者撮影)

の如何にはとられずに、あくまでも客観的な視点から歴史事実を集めること、すなわち史料中心の立場をとるといふ基本理念に基づいて出発しています」とも付け加えられている。

周知の通り、朝鮮半島の南北分断は在日朝鮮人社会に大きな影響を与え続けてきた。南北国家の分断と在日朝鮮人社会の分断、そのような政治的状況が、在日朝鮮人に関する歴史展示が公立のみならず民間でも十分に展開されてこなかった背景の一つであることは間違いない。その意味で同館が、前述の設立趣旨のもとに組織力を基盤にして開館したことは、在日朝鮮人の記憶・歴史の継承、在日朝鮮人による博物館運動という点でも注目すべき新たな動きであると位置づけることができる。

同博物館は、東京都心にある韓国中央会館別館のビル内の2階・3階部分を用いて開設されている。展示室は2階部分にあり、常設展示を行なう第1展示室、企画展示を行なう第2展示室に大きく分けられており、屋外テラスにも小さな展示がある。3階部分には図書資料室と映像資料室・セミナー室が設置されている。

展示室に入る前にエントランスがあり、「玉川べり」と題された写真パネルがある。パネルとともに砂利採取労働の様子を再現した小さな模型がケース展示されている。多くの在日朝鮮人が従事した砂利採取労働に関する小さな展示であるが、この史実でさえ、地域社会の中で公的な形で十分に継承されてはいない。砂利取りで生活を繋ぐ在日朝鮮人の集落が、全国各地の都市近郊に数多く出来ていたことは、多くの日本人の記憶からは消去されている。写真5枚に添えられた説明は次のように書かれている。

砂利取り労働には多くの朝鮮人が働いていました。重労働でしたが、手軽に出来たので砂利を使う都市近郊の河川には朝鮮人集落ができるほどでした。多摩川でも下流から上流の調布まで朝鮮人集落が出来ました。しかし、内務省は企業の大規模採取による河床低下を理由に下流の玉川から砂利採取を禁止しました。零細な朝鮮人労働者が働く場を失うこととなりました。朝鮮人たちは砂利採取禁止反対を訴え、闘いました。これを支持する北川冬彦たちが写真で朝鮮人の暮らしを描きました。

展示室に入って最初に目に飛び込んでくるのがこの展示である。抹殺されかねない在日朝鮮人の労働現場と風景の記憶、社会インフラを整備する、その下支えをしてきた彼ら、彼女たちの過酷な労働の記憶。そして生活の記憶。それを、ここを訪れるできるだけ多くの人びとに知ってもらい、できれば共有してもらいたい、忘れないでもらいたい。素朴な展示手法だけに、かえってそんな思いが強く、見る側に伝わってくる展示になっている。

北川冬彦は、尖鋭な批評的直感と暗喩の方法をもって、戦争の悲惨などを訴える作品を多作した詩人としてその名が知られている。1929年に発表された詩集「戦争」は、文学史上重要な作品と位置づけられており、ネオリアリズムを標榜する日本の代表的詩人として国際的にも高く評価されている。この展示は、詩人・北川冬彦の社会的活動の一面を垣間見せてくれるという点でも興味深い。

それでは、在日韓人歴史資料館の展示内容について、具体的にどのようなテーマが取り上げられているのか、小テーマも含め、ここでその概略を紹介しておきたい。

第1展示室（常設展示）では、在日朝鮮人史に関する次のようなテーマが取り上げられている。⁽¹²⁾

【日本への渡航】

渡航航路と船名、上陸風景と渡航証明書

【解放前の暮らし】

朝鮮飴売り、日本での仕事、一世が口ずさんだ歌謡曲ベスト5、在日朝鮮人の年度別職業一覧、在日人口表、母とミシン、朝鮮人集住地区の成立

【関東大震災での受難】

虐殺に関する報道、朝鮮人虐殺の図、大正震災画集、戦時下の渡航

【協和会】

日本に住む朝鮮人の徴兵

【強制連行】

動員された朝鮮人、炭鉱労働風景、常磐炭田の朝鮮人鉱夫

第1展示室では、解放前の在日朝鮮人の住まいと生活を復元した「バラック小屋」も展示されている。実物大の再現模型だけに迫力があり、インパクトのある展示手法が取られている。また、史実を物語る文献資料や写真などのアーカイブをはじめ、在日一世の記憶を物語るさまざまな実物資料が展示されている。

例えば「解放前の暮らし」の展示コーナーでは、砂利取り労働や後述する「ボロ屋」とともに、都市部に住む朝鮮人の代表的職業の一つであった朝鮮飴売りについても取り上げられている。1918年頃の朝鮮飴売りの風景を描いた絵画と、飴を作るのに使用されたハサミが展示されている。その他、ヤカンや炭火アイロン、アルミ製の弁当箱、ヨガン（おまる）に真鍮製のテヤ（たらい）、改造された部分の残る調理道具、一家の生活を支えるために使い込まれた足踏みミシンなどが展示されている。

「関東大震災での受難」「協和会」「強制連行」の展示コーナーでは、文献資料や写真資料などのアーカイブ、絵画資料を中心とした展示がなされている。国立歴史民俗博物館が所蔵し、河目悌二作と考えられている「朝鮮人虐殺の図」や、「李茂炯」という朝鮮人名が二重線で消され、「武田茂」という日本人名に書きかえられた小学校の通信簿「本名の消された通信簿」などは、朝鮮人に対する民族差別や朝鮮植民地支配による創氏改名の事実を示す説得力のある資料であり、展示全体の中でも重要な位置を占めている。

次に第2展示室を見てみよう。同展示室は「企画展示室」として設定された展示空間であるが、現在は、解放後の在日朝鮮人の歩みを展示している。日本各地から祖国へ帰国する様子や解放直後の生活、外国人登録法改正要求運動に代表



写真4 同館常設展示室（筆者撮影）

される権益養護運動などについて展示されている。同時に、ミニ企画展示として「それは在日留学生からはじまった－2・8宣言から3・1独立運動へ」が行なわれている。「解放後の生活」展示では、次のようなテーマが取り上げられ、実物資料や写真パネルが展示されている（写真4）。

【解放そして帰国】

仙崎港における帰国の風景、遺骨で帰った人、日本渡航者に対する取り締まり

【「在日」のはじまり】

在日本朝鮮人連盟（朝連）、在日本朝鮮居留民団（民団）、諸団体（朝鮮建国促進青年同盟、朝鮮青年同盟本部、朝鮮文化教育会）

【解放直後のくらし】

どぶろく造りの摘発、在日とパチンコ

【民族教育のはじまり】

朝鮮学校に学ぶ子どもたち、阪神教育闘争

【外国人登録法改正要求運動－指紋押捺拒否闘争－】

指紋押捺拒否者、外登法改正運動での「在日世代」の台頭、外登法改正要求・大衆行動、記録映画「指紋押捺拒否」

このように、「解放後の生活」で取り上げられている内容は、在日一世のみならず、二世や三世にいたる歴史をカバーし、民族教育などの展開と日本政府の抑圧、外国人登録法改正要求運動、指紋押捺拒否闘争など、差別・抑圧の実態とそれらに対する抵抗運動を表象するものが多く、植民地主義の継続を強く思わせる内容となっている。指紋押捺を拒否した登録証などの実物展示は、歴史的事実を知らない日本人から見ると、驚きを禁じえないであろう。それらは説得力のある写真とともに展示され、内容を理解しやすいように分かりやすく展示されている。

また日本の国内法では違法行為とされ、解放前から貧しい生活を支えるために行なわれ、摘発の対象とされることも多かった「どぶろく」作り。そのために使われた甕などは、在日朝鮮人の生活の記憶を物語る代表的な資料として展示されている。日本の代表的な娯楽産業であるパチンコについても、在日朝鮮人がそれを支える主体であった事実を、この展示を見て初めて知るか、あるいは自らの記憶を手繰り寄せながら再認識・再確認する日本人が多いのではないだろうか。

その他、写真パネルを中心とするミニ企画展示として、筑豊地域に残る「アラン峠」と呼ばれた朝鮮人集落に関する展示が行なわれている。このように全国各地に点在していたにも関わらず、地域でもその存在が忘れ去られている朝鮮人集落の歴史を掘り起こし、その記録化を進めていくこともこの博物館の重要な課題である。

同時にそれは、日本の地域史研究にとってもきわめて重要な作業であるはずである。全国各地の郷土資料館や歴史民俗資料館などが、この活動から学ぶことは少なくないと思われる。学芸員時代の自らの活動を省みて、改めてそう確信する。

屋外テラスでは、1930年代の朝鮮市場を再現した展示コーナーが印象的である。また、そこでは「1960年代のバタヤ部落」の写真パネル展示が行なわれている。「バタヤ部落」については、次のような説明がなされている。写真は1965年10月22日号の『アサヒグラフ』に掲載された東

京都豊島区要町のバタヤ部落と、そこで遊びに興じる子どもたちの写真である。

植民地時代から解放直後の在日韓人の都市およびその近郊での代表的な職業のひとつは廃品回収業でした。いまふうに「リサイクル」と言えば聞こえがよいですが、籠を背負うか、リヤカーを引いて「くずーい、おはらい」と言いながらボロ切れ、紙くず、古新聞、鉄くずなどを集める仕事でした。別名ボロ屋、ばた屋（バタヤ）と呼ばれ、「汚い」、「臭い」と不潔の代名詞でした。日本人が嫌った仕事だけに朝鮮人が多かったのです。解放直後だけでなく1950年代から60年代、70年代と在日同胞の多くはボロ屋、バタヤ、くず鉄屋などで生計を立てていました。

このように、在日韓人歴史資料館では、在日朝鮮人の歴史を、史実とそれを支える資料を示しながら、植民地支配による差別や抑圧の実態、植民地期および解放後の労働・生活・文化等を総合的に把握し、展示しようとしている。生活や産業、あるいは差別・抑圧に関する実物資料、映像、文献資料で表象される在日朝鮮人の展示は、それを見る側に、彼ら、彼女らの存在条件が何であったのかという点を確認させる作用を持つ。この博物館で展示されている資料を通してそのことに接し、厳しい社会的条件の中で生き抜く姿を知ることで、在日朝鮮人の生きかたの「太さ」や「しなやかさ」さえ感じる場があった。しかし同時に、在日朝鮮人の周囲には、戦後日本社会に潜在する植民地主義的な状況が、未だに根強くあることが、展示を通して見る側に十分に理解されるようになっている。その点を見落としてはならないだろう。

在日朝鮮人の記憶をめぐる資料集積の新たな始まりを意味する在日韓人歴史資料館。その存在意味はきわめて大きく、その学術的・社会的・教育的役割は、ますます重要になっていくものと思われる。

④……………むすびにかえて

先にも述べたように、在日韓人歴史資料館は、日本による朝鮮植民地支配の事実上の開始から100年に当たる2005年秋に開館した。在日朝鮮人自体が三世・四世の時代となり一世の歴史的体験や記憶が「風化」しているという現状の中で、自分から近い祖先の過去や歴史を見ることによって、在日朝鮮人の存在条件を確認してもらうということ、在日韓人歴史資料館には、そのような目的と意義があるように思える。この点は、丹波マンガン記念館にもあてはまる点である。

同時に、二つの博物館の展示が改めて示しているのは、日本人・日本社会にとって在日朝鮮人、あるいは在日朝鮮人社会が「隠された存在」であり続けているということである。したがって、彼ら、彼女らに対する差別がいつまでもなくなる。日本社会の中で「多文化共生」を実質化し、その意味を具体的に深めていくためには、本稿で取り上げたような博物館や展示活動は社会的に必要不可欠であり、より活性化していくことが重要であろう。

繰り返しになるが、日本・韓国双方で、在日朝鮮人に関する研究書などの刊行が増えているとはいえ、大多数の日本人、そして韓国人は、在日朝鮮人の歴史や社会的状況を知らないままの状況が続いている。在日朝鮮人の記憶の継承は、日本における固有の歴史的課題であり、今後は、行政立

の施設がこれを分担すべきであると思われる。地域史概念の中に、より積極的に在日朝鮮人の生活史、彼ら、彼女らが果たしてきた歴史のかつ社会的役割について組み入れる必要があり、史実の掘り起こしと継承という点も含めて、それを公立博物館の展示にもきちんと反映させなければならない。同時にこのテーマは、東北アジア共有の歴史的課題であるともいえるだろう。

郷土や地域という概念から在日朝鮮人を排除して、その歴史的実を語ることは不可能であるし、科学的ではない。博物館の歴史展示が、彼らを「異文化」として位置づけ、囲い込むのではなく、差別・抑圧の歴史を認識し、語り、それを乗り越えていくためにも、産業・文化などで果たしてきた役割をより積極的に明らかにし、関連資料を収集していくことが重要であろう。在日朝鮮人は文化的側面だけで記憶され、表象されることが多い。しかし、彼ら、彼女らが受けてきた差別や抑圧、それに対する抵抗運動や人権問題を踏まえた展示を行なうこと。継続する植民地主義の状況を伝えていくこと。二つの博物館の存在と展示活動は、そのことの大切さを端的に物語っているといえるだろう。

本稿の最後に、丹波マンガン記念館について改めて述べておきたいことがある。この博物館は、まさに、抹殺されようとしているマンガン鉱山労働に関わった在日朝鮮人の記憶、被差別部落労働者の記憶、朝鮮人強制動員、「じん肺」闘争の歴史を継承するために設立された博物館であり、資料展示施設や旧マンガン鉱山の坑道をも含む、国内唯一のフィールドミュージアムである。欧米における博物館発達の歩みを見れば分かるように、博物館は帝国主義・植民地主義の産物という歴史的側面を持っており、現代においても、多くはその本質から完全には抜け出していない。しかし、丹波マンガン記念館のような博物館運動は、記憶を軸とする植民地主義への抵抗を試みているという意味で、博物館そのものの持つ本質を変化させる試みでもあるとも言えるだろう。この点においても、本稿で取り上げた在日朝鮮人による博物館運動は、「異文化」とされる側の記憶と表象の意義を表現するものとして注目すべき普遍的価値を有していると考えられる。今後、日本社会の中で国公立博物館の展示内容に、これらの成果が積極的に反映されることを期待したい。同時に、在日朝鮮人による博物館や博物館運動を日本社会の中で支援し、根付かせていく社会的な基盤を作ることも重要な課題であると思われる。

在日朝鮮人社会の中でも、一世に残された時間はそう多くない。日本社会で、差別的な条件の中で働き続け、国籍による差別から軍人恩給や年金などからも排除された彼ら、彼女らを、単に「弱者」として位置づけることではなく、今、急いでなされなければならないことは、一世の存在と歴史を知り、学ぶこと。そして、彼らの生き様を記録し、記憶を記録化すること、そして差別的な諸制度を改めていくための行動であろう。

個々別々さまざまな事情で、一カ所に定住することが少なかった在日朝鮮人一世。彼ら、彼女らに関する資料は、移転を繰り返すたびにどんどん廃棄されたと聞く。時間の経過とともに、それだけ実物資料が集めにくい状況が増していく。残された資料だけでなく、その言葉を残すことも、記憶を記録化する機能を持つ博物館の重要な役割である。「特に教育の機会を奪われた在日朝鮮人一世の女性の多くは、自らの記録を文字で残すことができないでいる。彼女たちの声をどう残すのかも大きな課題であろう。⁽¹³⁾「異文化」とされる側の記憶と表象。歴史を扱う博物館が教えられることは限りなく多い。」

【謝辞】本稿掲載の写真について、丹波マンガン記念館、在日韓人歴史資料館には多大なご協力をいただき、また掲載のご許可いただきました。ここに、記して謝意を表します。

註

- (1)——朝鮮から来た人々や、日本で生まれ育った子孫に関しては、「在日朝鮮人」「在日韓国人」「在日コリアン」「在日韓国・朝鮮人」「在日同胞」など、実にさまざまな呼び方があり、一つに括ることはできない。またその呼称に関しては、政治的にも複雑であるが、本稿では民族の総称としての意味を重視し、「在日朝鮮人」を用いる。
- (2)——尹健次「『在日』を生きるとは」(岩波書店、1992年)他、梶村秀樹による一連の著作などを参照のこと。たとえば、梶村秀樹著作集〈第6巻〉『在日朝鮮人論』(明石書店、1993年)など。
- (3)——在日朝鮮人人口の推移等については、田村紀之「内務省警保局調査による朝鮮人人口(Ⅰ)」(『経済と経済学』46号所収、1981年)を参考にした。
- (4)——朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』334頁(未来社、1965年)。
- (5)——博物館における在日朝鮮人の展示に関する研究としては、文公輝「常設展示『在日コリアン』コーナーについて」(国立歴史民俗博物館編『歴史展示のメッセージ』所収、アム・プロモーション、2004年)があり、日本人がこの問題を考えていく上で参考になる。
- (6)——註5文献。大阪人権博物館では、2005年の常設展示全面リニューアルに際して、学芸員と館外の在日朝鮮人とで組織したワーキングチームで展示基本計画案を組み立てる作業を行なった。展示主体としての博物館側と、展示される側の当事者との共同作業による展示案立ち上げの試みは、両者の関係性を新たに再構築していくという点においても注目すべきものと考えられる。
- (7)——国立民族学博物館特別展図録『多みんぞくニホン-在日外国人のくらし』(2004年)を参照のこと。とくに、同図録に収録されている島村恭則「在日外国人の

来歴と旧植民地政策」、藤井幸之助「地域住民としての外国人市民」そして、「在日コリアン」コーナーでの解題である、藤井「国家と民族・国籍のはざままできた100年と、これから」は展示解説としても重要な論考である。

(8)——国立ハンセン病資料館では、本文で紹介した資料のほかに、常設展示室の証言映像コーナーの中で、国立療養所長島愛生園(岡山県瀬戸内市)在住の在日朝鮮人ハンセン病回復者・金泰九氏の証言を見ることが出来る。また常設展では、視覚しょうがいを持つ歌人である国立療養所栗生楽泉園(群馬県草津町)に住む金夏日氏の写真が展示されている。在日朝鮮人ハンセン病回復者の記憶と表象については、拙稿「在日朝鮮人ハンセン病回復者の記憶と記録」を参照のこと(東京外国語大学海外事情研究所『Quadrante』第9号所収、2007年)。また、在日朝鮮人入所者に対する年金差別問題については、金永子「国民年金成立とハンセン病療養所の在日朝鮮人」(『四国学院大学論集』101号所収、1999年)に詳しい。

(9)——同館については、拙稿「丹波マンガン記念館-朝鮮人マンガン鉱山労働者の記憶」(季刊『前夜』創刊号所収、2004年)も参照されたい。

(10)——丹波マンガン記念館『ワシらは鉱山で生きてきた-丹波マンガン記念館の精神史』83頁、1992年)。

(11)——註10文献、91頁。

(12)——展示内容は、2007年3月時点のものである。同館では、2007年6月に展示の一部リニューアルがなされる予定である。

(13)——この点については、横浜市寿町で開かれている「寿識字学校」における識字教育実践が参考になる。大沢敏郎『生きなおす、ことば』(太郎次郎社、2003年)

(東京学芸大学、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(2007年6月29日受理、2007年9月14日審査終了)

Memories of those Classified as ‘Other Culture’ and its Representation: *Zainichi* Koreans (*Zainichi chosenjin*) and Museum Movement

KIMIZUKA Yoshihiko

What are classified as ‘other cultures’ in Japan? Those are history, life and cultures of foreigners living in Japan. The largest group is the *Zainichi* Koreans (Koreans in Japan) which has the longest history together with the *Kakyo* (Chinese in Japan). Most *Zainichi* Koreans immigrated in the historical process of Japan’s modernization and colonization policy. In this paper, I refer to two museums, *Tanba mangan kinenkan* (Kyoto-city) and Japanese Korean History Museum (Tokyo) which are organized by different foundations and both work to record the memories of labor and lives of *Zainichi* Koreans. I examine how they record the memories of *Zainichi* Koreans and represent them in exhibitions and discuss its contents and meanings by focusing on the museum movement of *Zainichi* Koreans. These two museum exhibitions present us the fact that the existence of *Zainichi* Koreans people and their society have been hidden from the eyes of Japanese people and its society.

To substantially practice multiculturalism in Japanese society, museums such as these are essential. The inheritance of memories of *Zainichi* Koreans and related issues are specific historical problem for Japan and it needs to be dealt by governmental sectors in the future. We need to include *Zainichi* Koreans’ life history, their historical and social roles in the society, digging up historical facts and its inheritance need to appear both in the concept of local history and also in public museum exhibitions.

It is important for history museum exhibitions not to label and frame *Zainichi* Koreans as ‘other culture’, but rather, to raise awareness towards the history of discrimination and oppression towards them. In order to overcome such history, it is important to shed light to their valuable roles in industry and culture, and also to collect, conserve and exhibit related materials. It is often the case to represent only the cultural aspects and its memories of *Zainichi* Koreans. However, we also need to develop exhibitions on discrimination, oppression, human right issues and present ongoing colonization situation. The existence of those two museums and their exhibition activities suggest its importance of this issue.